

非漢字系上級日本語学習者による漢語動名詞の意味推測の困難点 —「する」の有無が推測に及ぼす影響—

桑原 陽子

要旨

本研究の目的は、非漢字系上級日本語学習者が漢字2字の漢語動名詞の意味を推測するとき、正しい意味推測を困難にする要因について検討することである。意味推測課題とインタビューによる調査の結果、次の4つの要因を明らかにした。(1)熟語を構成する漢字が動詞性を持たない。(2)熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる。(3)既成の漢字熟語から派生して使われている漢字がある。(4)漢字熟語の語構成に関する誤った思い込みがある。このうちの(1)から(3)の誤用の詳細について分析した。さらに、それらの漢語動名詞に「する」がついたときにどのように意味が修正されるかについても分析を行った。

キーワード：漢語動名詞、意味推測、非漢字系上級日本語学習者

1. 問題の所在と目的

非漢字系上級日本語学習者が漢字2字熟語（以後、漢字熟語とする）の意味を推測するとき、何が正しい意味推測を困難にしているのだろうか。桑原(2012)では、非漢字系上級日本語学習者に未習の漢字熟語の意味を推測してもらい、推測の誤りの原因を探った。調査に使用した漢字熟語は、その熟語を構成する個々の漢字は知っており、漢字熟語の意味だけがわからない、というものである。たとえば、「点火」は、調査に参加した学習者全員が「点」も「火」も知っていたが、「点火」の意味は知らなかった。文脈情報が何もない状況で「点火」を見た場合、学習者は熟語を構成する「点」と「火」の意味とその位置関係から意味を推測するしかない。そのような意味推測の過程をインタビューによって詳しく聞いた結果、上級学習者は漢字熟語の語構成について明示的な知識を持っており、それが意味推測に影響を及ぼしていることが示唆された。語構成についての知識とは、漢字熟語を構成する2つの漢字のうちどちらがその語の品詞を決めどちらが語の意味の中心をなす要素か、という漢字熟語の「主要部」(小林, 2004)についての知識である。

ところで、桑原(2012)の調査は、「点火」「点火する」「ろうそくに点火する」のように、意味推測に利用できる情報量が異なる3つの段階を設け、それぞれの段階で「点火」の意味を推測してもらっている。そのうち、分析対象としたのは、漢字熟語を単独で見せて意味推測をしてもらったときのデータであった。たとえば「点火」だけを見たときには、次のような誤った推測があった。

- (1) 火事のあるところ(点)
- (2) 点在しているような特別な火

このような推測が行われた後に「点火する」を見せると、(1)の推測を行った学習者は、どのように意味を解釈したらよいかのわからなくなってしまった。(2)の学習者は(3)のように推測内容を修正している。

(3) 小さい火をつけること。「する」は意志動詞だから、自分の範囲でおさめられるようなことだと思う。

どちらの学習者にも共通しているのは、「点火」だけを見たときには、それが動詞として使われる語であるとは思わず、「点火する」を見てはじめて「する」が後続することがわかり、推測内容を大きく修正しなければならなかったということである。このことは、漢字熟語の主要部の問題とも関わる。なぜなら、その熟語が動詞として使われるかどうかを判断することは、その熟語の品詞を決めることだからである。

桑原(2012)のデータを見直すと、漢字熟語に「する」がつくことがわかり意味の修正が必要となったときに、さらに推測の誤りが生じていることがわかった。そこで、本研究では、桑原(2012)で行った調査結果の中から、「点火」のように「する」が後続してサ変動詞になる漢字熟語の意味推測の困難点について分析し、(4)(5)を明らかにする。

- (4) 「点火」が「点火する」のように動詞として使われる語であると予測できなかったのはなぜか。漢字熟語だけを見たときに、それが動詞になりうるという予測を難しくする要因は何か。
- (5) 品詞の情報が追加され、動詞として使われることが明らかになったときに、どのように意味が修正されるのか。

「する」が後続して動詞になる漢字熟語には、「漢語動名詞」(小林, 2004)、「漢語サ変動詞」(日向, 1994)、「漢字二字熟語のサ変複合動詞」(松岡・玉岡・酒井, 2009)など、さまざまな呼び方がある。本稿では、小林(2004)にしたがい、「漢語動名詞」と呼ぶことにする。ただし、先行研究を引用する場合は、その論文の表現をそのまま使用する。

2. 調査方法

2-1. 調査協力者と調査時期

非漢字系上級日本語学習者6名である。6名全員が、調査時に日本国内のF大学上級日本語クラスに在籍していた。日本語学習開始以前に漢字の知識を持っていた学習者はいなかった。学習者の日本語学習歴を表1に示す。学習者Aから学習者Cは、桑原(2012)の調査協力者である。それに加えて、新たに3名の学習者に協力を依頼した。

表1 調査協力者の日本語学習歴（調査時）

	日本語学習歴	日本語能力試験	既知漢字数*
学習者A	3年	2級合格	1000字以上
学習者B	5年6ヶ月	2級合格	1000字以上
学習者C	2年6ヶ月	2級合格	1000字以上
学習者D	4年4ヶ月	未受験	1000字以上
学習者E	3年4ヶ月	未受験	1000字以上
学習者F	3年7ヶ月	1級合格	1000字以上

*既知漢字数は自己申告による

調査は2回に分けて行った。調査の概要は(6)のとおりである。第2回調査は、第1回調査で得られた結果の確認のために行った。

(6) [第1回調査]

調査協力者：3名(学習者Aから学習者C)

調査時期と調査回数：2012年11月から2012年12月まで。1人あたり最大14回。

[第2回調査]

調査協力者：3名(学習者Dから学習者F)

調査時期と調査回数：2014年8月。1人あたり2回。

2-2. 調査材料

第1回調査で使用した漢字熟語は、桑原(2012)の280語である。そのうち124語が漢語動名詞である。第2回調査で使用した漢字熟語は42語である。第1回調査で正しく意味推測されなかった漢字熟語を中心に40語を選択し、新たに「熱中」「物色」を追加した。その42語中32語が本研究の分析対象の漢語動名詞である。詳細は以下のとおりである。

下見、助長、音読、他界、点火、軽減、死別、転売、確約、白状、空爆、両立、注力、流用、服用、成約、着手、断念、調達、死守、他言、自立、病欠、運休、密集、密売、散財、分乗、白熱、物色、熱中、間食

調査用紙は3種類作成した。調査1回あたりA4サイズ1枚で、漢字熟語20語(第2回調査は21語)と、漢字熟語ごとに意味推測の確信度を評定するための数値を記載した。調査用紙1には漢字熟語だけを記載した(例：点火)。調査用紙2には、漢字熟語の品詞が特定できる最低限の情報を追加した(例：点火する)。調査用紙3では、さらに文脈情報を増やした(例：ろうそくに点火する)。

2-3. 方法

調査の手順は(7)から(11)のとおりである。(7)から(9)は桑原(2012)と同様である。

- (7) [課題1] 調査協力者に調査用紙1を渡し、漢字熟語の読み方をひらがなで書いてもらい、漢字熟語の意味を推測してもらった。回答は日本語か英語とした。
- (8) (7)で回答した漢字熟語の意味の正しさにどのぐらい自信があるかについて、それぞれ5段階で評定してもらった。
- (9) (8)の終了後、(7)と(8)の回答について、調査者が日本語でインタビューを行った。特に、漢字熟語の意味について、なぜそのように考えたのかを詳しく尋ねた。
- (10) [課題2] 調査用紙2を使って課題1と同様に行った。
- (11) [課題3] 調査用紙3を使って課題1と同様に行った。

(9)から(11)までのインタビューの会話は、調査協力者の承諾を得た上で、すべてICレコーダーで録音した。

2-4. 分析方法

漢語動名詞32語について、第1回調査、第2回調査で得られたインタビューデータの中から、次の(12)(13)を分析の対象とした。

- (12) 意味の推測を誤った漢字熟語について、調査協力者が報告したこと。
- (13) 課題2で行われた意味の修正について、調査協力者が報告したこと。

本研究では課題2までを分析対象とし、調査用紙3を使った課題3(11)の分析は他稿に譲る。なお、本稿で誤推測の例を記載する場合は、どの学習者の事例かを示すために、表1の学習者のラベル「学習者A」から「学習者F」を使用することにする。また、学習者の回答やインタビュー中の発言は、できる限りそのまま記述する。

3. [課題1] 漢語動名詞を単独で見たと時の意味推測の困難点

課題1では、漢語動名詞を単独で見るので、漢語動名詞を構成する個々の漢字の情報しか意味推測に利用できない。正しい意味推測を困難にする要因としては、次の(14)から(17)が明らかになった。

- (14) 熟語を構成する漢字が動詞性を持たない。
- (15) 熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる。
- (16) 既成の漢字熟語から派生して使われている漢字がある。
- (17) 漢字熟語の語構成に関する誤った思い込みがある。

このうち、(17)は桑原(2012)で検討したので、本稿では(14)から(16)についてまとめる。

3-1. 熟語を構成する漢字のどちらも動詞性を持たない

熟語の中に動詞性を持った漢字がない場合、漢語動名詞であるとは推測されにくく、学習者は名詞あるいは形容詞として解釈しようとする。たとえば、次のような誤推測があった。「」内は学習者の誤推測の例である。

(18) 他界：「他の世界」(学習者B, C, D, E, F), 「別の業界」(学習者A)

(19) 白状：「記入されていないフォーム」(学習者A), 「何もない状況」(学習者B)

日向(1984)によれば、漢語サ変動詞のほとんどは、「深謝する」「噴火する」などのように、前部と後部、あるいは前部と後部のいずれかに動詞性の訓や意味を持つ漢字か、「介する」「禁ずる」「察する」といった1字で漢語サ変動詞になる文字で構成されている。松岡他(2009)が「熱中する」を反例として指摘しているように、漢語動名詞の中には、熟語の中に動詞性を含む漢字が含まれていないものも存在するが、それらは少数派であり、日向(1984)が示すように、多くはその構成要素として動詞性を持つ漢字を含んでいる。(18)(19)の例からは、動詞性がある漢字が含まれない漢字熟語は、漢語動名詞であると推測しづらいことがわかる。

また、(1)(2)で示した「点火」は、「火を点す」という意味である。しかし、「点」は「点^{てん}」として使用された場合の使用頻度のほうが圧倒的に高い。そのために、学習者にとって「点」を「点^{とも}す」という動詞としてとらえることが難しく、意味推測が成功しなかったと考えられる。

3-2. 熟語を構成する漢字の中に、接辞的用法を連想させるものがある

「接辞的」とは、森岡(1967)の漢語の成り立ちに関する(20)のような観察による。

(20) 派生語を作るために接辞的に用いられる単純結合形式

未-開拓 不-用意 有-意義 無-意味 反-主流 全-世界 新-世界 要-注意

一般-性 一般-化 一般-的 北極-圏 アジア-系 教育-者 運転-手 機関-士

語頭・語尾にあるこれらの漢字を常に接辞と認めることには些か躊躇を感ずるが、右のような語構成の場合には、形式的な不熟辞として接辞に準ずるものと考えたい。

(森岡, 1967, P. 41)

漢字熟語中の漢字が、森岡(1967)の指摘する接辞的用法を連想させると、それに影響された意味推測が行われやすい。(21)から(26)がこれに該当する。

(21) 流用：「lavatory(洗面所)」(学習者A), 「液体を流す用具」(学習者B), 「みんなが使うもの」(学習者F)

- (22) 服用：「服を作るための材料」(学習者B), 「服のために使うもの」(学習者F)
- (23) 助長：「助けるグループのリーダー」(学習者C), 「副長のように助けるポジション」(学習者D), 「ボランティアとか人のための activity のリーダー」(学習者E), 「assistant」(学習者F)
- (24) 自立：「私立と同じ」(学習者A, B), 「店のように自分でできたもの。『立』は国立や私立のような establishment のこと」(学習者D)
- (25) 着手：「何かを着る人」(学習者E, F)
- (26) 熱中：「熱を持っている状態」(学習者D)

(21)(22)の学習者はいずれも「用」について、「子供用」「浴用」「一般用」と同様に、使われる対象を示すと考えていた。たとえば(27)は、「流用」に対して、「みんなが使うもの」と解釈した例である。

- (27) 「流行」の「流」と、「用」は「一般用」みたいな意味。みんなが使えるみたいな意味だと思う。(学習者F)

(23)はすべて「長」について、「社長」「課長」のような組織の役職名を示すと考えている。特に「助」の意味から、役職名にありそうだと考えたようである。(24)は、「立」を「国立」「私立」で使われる「立」と考えたことによる。(25)は「手」を「歌手」のように「そのようなことをする人」という意味だと考え、(26)は「中」を「勉強中」のように「～している」「その状態の中にある」という意味だと考えている。

このようにこれらの事例では「用」「長」「立」「手」「中」が接辞的に用いられていると誤って解釈されていることがわかる。それは、「流用」「服用」の「用」をはじめ「助長」の「長」、「自立」の「立」などが、漢字熟語の後部(右側)にあり、接辞的に用いられたときの「○用(例：子供用)」「○長(例：社長)」「○立(例：国立)」などと同じ構造だと考えられたからであろう。

3-3. 熟語を構成する漢字の中に、既成の漢字熟語から派生して使われているものがある

「派生」とは、森岡(1967)による。たとえば、「校舎」「校友」「校内」「校外」「下校」の「校」は「学校」から派生した漢語形態素であると考え(森岡, 1967 p. 42)。このような成り立ちの漢字熟語には、たとえば、次のような誤推測があった。

- (28) 確約：「確か, 若干」(学習者A), 「precisely」(学習者E)
- (29) 運休：「運ぶ休み(休みが動くこと/ずらせること)」(学習者B)
- (30) 病欠：「健康(病が欠ける, つまり病気がない)」(学習者A), 「病気になることがない」(学習者F)

(28)の「確約」の「約」は「約束」から派生したものである。しかし学習者にとっては、「約」が1字で使われる場合の意味「だいたい」のほうが想起しやすかったようである。たとえば、(31)から(33)がその例である。なお(32)は、「約」の意味を誤って理解している。

- (31) 「確」が「確か」、「約」が「若干」の意味。「約」は見積の時に使う言葉。(学習者A)
 (32) 「約」は「約1000人」の「約」で、その意味は「ちょうど」。「『确实』で『ちょうど』」だから、「precisely」という意味。(学習者E)
 (33) 「確」は「確かに」、「約」は「だいたい」で、「確約」はわからない。(学習者F)

(29)の「運休」の「運」は「運転」から派生しており、(30)の「病欠」の「欠」は「欠席」から派生しているが、「運転」も「欠席」も学習者には連想できていない。既成の漢字熟語を前提として、その漢字熟語の1字をとって別の漢字熟語が作られた場合、前提となっている漢字熟語と結びつけることは容易ではないことがわかる。たとえば、「病欠」の意味が推測できなかった学習者からは(34)のようなコメントがあった。

- (34) 「病気」と「欠く」。でも意味はわからない。(学習者B)
 「病」と「欠けている」の関係がわからない。(学習者D)

以上のように、(14)から(16)について本稿でとりあげたほとんどの事例の学習者は、その漢語動名詞を単独で見たときに、動詞性があるととらえていなかった。次節では、これらの漢語動名詞に「する」がついたときに、どのように意味が修正されたのかについてまとめる。

4. [課題2]「する」がついてからの意味推測

課題2の回答を課題1の回答と併せて、表2にまとめる。()内の数字は、そのように回答した学習者が2名以上の場合の人数を示す。無回答は網掛けにし、正答は太字とする。

表2 課題1から課題2への回答の変化

漢字熟語		課題1の回答	課題2の回答
持たない 構成する漢字が動詞性を	他界	他の(別の)世界 (5)	他の世界に旅行する 死ぬ 無回答 (3)
		別の業界	引っ越す, あるいは仕事を変える
	白状	記入されていないフォーム	消す
		何もない状況	消す・初めの(白の)状態に戻す
		無回答 (3)	最初の(白い)状態に戻す 無回答 (2)

漢字熟語		課題 1 の回答	課題 2 の回答
熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる	流用	lavatory (洗面所)	流すこと
		液体を流す用具	花に水を流す・やる
		みんなが使うもの	みんなが使っている
	服用	服を作るための材料 (2)	無回答 (2)
	助長	助けるグループのリーダー	助けること
		副長のように助けるポジション	助けになる (「長」は無視する)
		ボランティアとか人のための activity のリーダー	無回答
		assistant	assistant が「長」の人を助ける
	自立	自分で作った (「私立」に近い)	独立と同じ? 個人的に家族の家から出て自分の生活を自分のお金です
		私立	無回答
店のように自分でできたもの		自分でできる。何かをつくる	
着手	着る人	着てみる 無回答	
熱中	熱を持っている	無回答	
既成の漢字熟語から派生して使われている漢字がある	確約	確か・若干	見積をする
		precisely	確認する
	運休	運ぶ休み	無回答
	病欠	健康	治る
		病気にならない	病気で欠席する (2)
	無回答		

「他界する」は、6名中3名がどのように意味を解釈したらよいかはわからなくなり、無回答であった。残り3名は、課題1で考えた「別の世界・業界」を利用して、「他の世界・業界へ行く」と考え、そこから「旅行」「引越」「死ぬ」の意味を導き出している。

「白状する」は、5名中2名が回答できなくなり、残りの3人は全員が『白い状態=最初の状態』にすることから「消す。最初の状態に戻す」と考えている。

このように、「白状する」「他界する」に対して何らかの回答があった場合は、いずれも課題1の回答を利用した推測となっている。「病欠する」を「治る」と推測しなおした事例も、「病欠」が「病気がない状態=健康」であると推測した課題1の回答を利用している。

一方、課題1で推測した意味をそのまま利用しなかった事例も見られる。たとえば、「流用する」について「流すこと」と回答した学習者は、(35)のようにコメントしている。

(35) たとえば「使用」と「使う」は同じ意味。そのように「用」は時々、動詞について、その動詞と同じ意味のことばになるから、「流用」も「流す」と同じだと思う。(学習者A)

「使用」は動詞性の類似した意味を持つ漢字「使」と「用」が並列して成り立っている。しかし、(35)の学習者は、「用」が「用いる」という動詞性の訓を持つことを知らず、「使用」の語構成についての誤った理解を「流用」の意味推測に利用した結果、「流」が「流用」の実質的な意味を表すと考えている。「流」だけを漢字熟語の意味推測に利用している点は、別の例の「花に水を流す(やる)」も同様である。

このほか、「助長する」では、「助」だけを利用した推測「助けること」「助けになる」が見られる。たとえば、インタビューでは(36)のようなコメントがあった。

(36) 「助長」は「する」がつくとは思わなかった。「長」があったからポジションか地位かなと思ったけど、「する」とついたら、もしかしたら「助けになる」とか。全体的な意味はわからないけど、「助」がありますから、「助ける、手伝う」とかになるんじゃないかなと思って。「長」はちょっと無視して。(学習者D)

また、「着手する」について「着る人」から「着てみる」に意味を修正した事例では、「手」についての言及はなく、「着」だけを「着る」と解釈して「着手する」の意味として利用していることがうかがえる。

「確約する」については、「確」を中心的な意味としてとらえた事例「確認する」(学習者D)がある一方で、「約」を中心的な意味としてとらえた事例「見積をする」(学習者A)がある。「約」という漢字には動詞性がないにもかかわらず、この学習者は『約』は見積をするときに使う表現だと考えており、それを利用して動詞として意味をとらえなおしている。

以上のように、「する」がつかないと思っていた漢字熟語が漢語動名詞であるとわかったとき、学習者の反応は大きく3つに分けられる。どのように意味を修正したらよいのかわからなくなってしまう。「する」のない状態で推測した意味を使って、動詞として解釈しなおす。「する」のない状態で推測した意味を一旦放棄して、漢字熟語を構成する2字の漢字のうち動詞性のあるほうの漢字を中心に意味を解釈しなおす。そして、表2からわかるように、正答する事例はごく少ない。

では、数少ない正答の事例では、どのように意味が推測されているのだろうか。(37)は「他界する」、(38)は「自立する」、(39)(40)は「病欠する」に対して正答した学習者のコメントである。なお、これらの回答が正しいことは、この時点で学習者には伝えていない。

(37) 最初(課題1)とまったく違う意味になっちゃった。亡くなった人は、この世とあの世があるんですから、他の世界に行くんじゃないかなと。〇〇語(学習者の母語)にも同じような表現があるんです。「亡くなりました」じゃなくて「あの世へ行きました」みたいに。

(学習者D)

- (38) 「独立」はいつも国とかですね。だからこれは個人的に家族の家から出て自分の家とか自分の生活を自分のお金で送っていることかな。(調査者からの「なぜ課題1からこんなに回答が変わったか」という問に対して)「する」はそういう連想させてるから。(学習者A)
- (39) (課題1は無回答)「欠」は「欠席」の「欠」ですよね。どうしてわかったかわからないけど、そう思った。(学習者B)

いずれも「する」がついたことによって、なぜか急にその意味が頭に浮かんできたように話している。しかし(37)は「母語にも同じような表現がある」と具体的に説明している。(38)は『『する』がそういう連想をさせている』としか答えていないが、その発言からは、構造がよく似た「独立する」を手がかりに、「独立する」との意味の差別化を図るために「独立は国、自立は個人」と自分なりに解釈していることがうかがえる。

「病欠する」については、「どうしてわかったかわからない」と答えた(39)に対して、(40)は、「病」と「欠する」のように意味の切れ目を考え、「欠する＝欠席する」が語の中心的な意味を担っていると考えている。「する」がつくことによって、動詞性がある「欠」を中心に意味を解釈しなおして結びつけて成功した例である。

- (40) 「病欠」は「病気がない」。でも「病欠する」は「欠席する。病気だから、欠席する」。(調査者からの『『病気がなくなる』と思わなかったか』という問に対して) ないです。どうしてだろう？ さっき「病欠」は、「病欠ことがない」と思った。「病気にならないことはあり得ない。絶対にみんな病気するから」みたいな例を考えた。でも「病欠する」は、「どうして欠席するか、というと、病気だから。病気だから欠席する」。(学習者F)

5. 考察と今後の課題

本研究では、漢語動名詞の意味推測を困難にする要因を、非漢字系上級日本語学習者へのインタビューから探った。その中で注目したのは、漢字2字熟語だけを見たときに、それに「する」がついて動詞として使われるかどうかの判断である。

漢語動名詞に対して誤った推測をしてしまう原因として、「(14)構成する漢字が動詞性を持たない」「(15)熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる」「(16)既成の漢字熟語から派生して使われている漢字がある」の3つが明らかとなった。

また、その漢字熟語に「する」がつくことがわかった場合、意味の修正が難しく、何も推測できなくなってしまう事例も多い。また、何らかの答えを出したとしても、動詞として使われることがわかっただけでは正しい意味にはたどりつけない事例が多いことが明らかとなった。

学習者のインタビューからは、その漢語動名詞を見たときにどんな漢字熟語を連想するか、あるいは個々の漢字から何を連想するかが推測に強く影響しており、その連想は非常に個人差が大きいことが示される。これは、桑原(2010)とも同様の結果である。

今回の事例の中でも、たとえば(30)の「病欠」に対して同じように「病気がないこと」と考えていた2名が、「病欠する」に対しては異なる意味推測を行っている。

さらに、今回とりあげなかった事例以外まで範囲を広げると、推測の内容はさらに多岐にわたる。たとえば、(25)の「着手」について学習者2名が、「歌手」のように「手」を「そのようなことをする人」と接辞的にとらえたが、そう考えなかった学習者もいる。たとえば、次のような回答である。

(41) 「入手？」手に入れる。たぶん「手に着いた」から。(学習者A)

(42) 「手袋」。「着く」と「手」で手袋かな。(学習者B)

(43) 「ものをスタートする」。手を何かするから。「着」は「つける」「つく」だから「手を着いて何かやる」。「着」は「ついた」みたいな。これから何かやるかなあと。(学習者F)

全員が「着」を「着く」と考え「手」との関わりで意味を考えているのは、正しい推測の方向だが、最終的な答えは3名の間で異なっている。(43)だけが正答である。このような違いは、学習者の持つどのような知識が影響しているのだろうか。

また、このような結果からは、漢字熟語の意味推測には文脈の支えが非常に重要であることが示唆される。本研究では分析の対象としなかったが、課題3でさらに文脈情報が増えた場合に、どのように意味が修正されるのかについては、継続して分析を行う予定である。

引用文献

桑原陽子(2010)「非漢字系日本語学習者の漢字未知語の意味推測における統語情報の利用-中上学習者のケーススタディより-『福井大学留学生センター紀要』第5号, 1-10.

桑原陽子(2012)「漢字2字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響-主要部の位置との関わりから-」『福井大学留学生センター紀要』第7号, 1-10.

小林英樹(2004)『現代日本語漢語動名詞の研究』ひつじ書房

日向敏彦(1984)「漢語サ変動詞の構造」『上智大学国文学論集』18, 161-179.

松岡知津子・玉岡賀津雄・酒井弘(2009)「アスペクトによる漢字二字熟語のサ変複合動詞化に対する予測」由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の意味と文法』121-137. くろしお出版

森岡健二(1967)「現代漢語の成立とその形態」『国語と国文学』44(4), 23-47.

The Difficulties in Interpreting Unknown Sino-Japanese Verbs for Advanced Learners of Japanese from non-Kanji Cultures: The Influence of the “Suru” Verb on the Inference.

Kuwabara Yoko

The purpose of this research is to investigate the factors contributing difficulties in interpreting an unknown Sino-Japanese verb by advanced learners of Japanese. The results showed the following four factors:

- (1) The Kanji compound does not contain the type of Kanji which have “verbness”.
- (2) The Kanji compound contains the type of Kanji which is easy to associate with usage as an affix.
- (3) The Kanji compound contains the type of Kanji which is derived from other Kanji compounds.
- (4) The learners have misunderstandings concerning word formation of the Kanji compound.

This paper analyzed errors stemming from (1) to (3). Furthermore, this paper also analyzed how a “Suru” verb can influence these errors.

Keywords: Sino-Japanese verb composed of two Kanji (Chinese characters), interpreting an unknown word, advanced learner of Japanese from non-Kanji cultures